

「実を結ばないいちじくの木」 マルコによる福音書 11章12～14節、20～25節

マルコ福音書は11章から、イエスさまの都エルサレムでの最後の一週間、特に十字架と復活の出来事を中心に描きます。

今日の聖書のお話は、イエスさまが実を結ばないいちじくの木を呪われる話です。とっても奇妙なお話です。一体どういう意味があるのでしょうか。

イエスさまは都エルサレムに入城されましたが、夜には近くのベタニア村の宿に宿泊されました。2日目の朝、イエスさまと弟子たちはベタニア村を出て、直ぐ近くの都エルサレムに向かおうとされました。その時、朝ご飯を食べていなかったのか、イエスさまは空腹を覚えられました。ちょっと離れたところにいちじくの木があったので、イエスさまはひょっとしていちじくの実がなっていないかと思っていちじくの木に近寄られました。しかしそのいちじくの木は、葉っぱは青々と茂っていたのに、何の実もつけてなかったのです。そこでイエスさまは実を結ばないいちじくの木に向かって「今から後いつまでもお前から実を食べる者がないように」と呪いと裁きの言葉を語られたのです。これだけ読むとほんとに変な話です。この時、都エルサレムでは過越祭が行われていたので、季節は春、今の3月から4月です。いちじくの木が実を結ぶのは、初夏の6月頃です。その時は春の季節だから、いちじくの木が実を結んでなくても当然です。なのに実を結んでないと言ってイエスさまが怒られ、呪いと裁きの言葉を言ったのだとしたら、イエスさまはなんてわがままなのかと言う事になります。

いちじくの木とは象徴的なものです。実は旧約聖書の預言者たちが、神ヤハウェが最初に選んで神の民とされたイスラエルの民を、いちじくの木やいちじくの実にたとえているのです。預言者のエレミヤもホセアも、ヨエルもミカも、イスラエルの民をいちじくの木にたとえています。この旧約聖書の背景がわかると、今日の聖書の話はよくわかると思います。

創造主である神ヤハウェは世界のすべての民を神のもとに招くため、最初に小さく弱いイスラエルの民を選び、神の民にされました。そしてイスラエルの民は救いの恵みを与えて下さった神ヤハウェだけを信頼して生きると約束したのです。

ところがイスラエルの王国時代になり、ダビデ王の息子のソロモン王が都にエルサレム神殿を建て、そこで神ヤハウェを礼拝するようになったのですが、王もイスラエルの民も神ヤハウェに背くようになり、エルサレム神殿にはいろんな神々の像が立てられ、拝まれるようになります。そして王も民もさんざん神ヤハウェに背く自分勝手な生き方を繰り返すのです。そこに神の言葉を語る預言者たちが登場し、王やイスラエルの民に対して、いつまで神に背く自分勝手な生き方を続けるのか。神ヤハウェはいちじくの木であるあなた方が、もう一度神ヤハウェのもとに、悔い改めて立ち帰り、神ヤハウェに忠実に従って生きるという実を結んでほしいと願っておられるのだと何度も警告し、呼びかけたのです。預言者ミカは言いました。「なんと悲しいことか…もは

や食べられるぶどうの実はなく、わたしの好む初なるのいちじくもない」と。預言者たちはこのままイスラエルの民が神ヤハウエに逆らい続け、エルサレム神殿でいろんな神々の像を拝み続けるなら、神ヤハウエはいちじくの木を枯らす、つまりイスラエルの民に神の裁きをくだすと警告し続けたのです。

今日のイエスさまの言葉はこの旧約聖書の預言者たちの口を通して神さまが警告して来られたことが、いよいよ実現してしまうぞということを表す象徴的な行為なのです。

いちじくの木とはイスラエルの民であり、エルサレム神殿を指しているのです。神ヤハウエは王国時代から何百年も忍耐し、実を結ぶのを待ち続けてくださっているのに、いまだにいちじくの木であるイスラエルの民は、実を結ぶ気配さえない。6月頃に実を結ぶいちじくの木ですが、4月でもまだ食べられなくても小さな青い実はつき始めている頃です。しかしいちじくの木、イスラエルの民は小さな青い実さえつけていないとイエスさまは怒られたのです。実を結ぶとは、私たち人間が自分勝手に生きるのをやめて、もう一度創造主である神さまのもとに立ち帰り、どんな時も神さまを信頼し、神さまに従って生きることなのです。

14節の「今から後いつまでも、お前から実を食べる者がないように」というイエスさまの言葉はこのままでは神の民として選ばれたイスラエルの民とエルサレム神殿は神の裁きで滅んでしまうぞという警告の言葉です。そして翌日、本当にそのいちじくの木は枯れていたのです。

いつまでたっても神ヤハウエに立ち帰って来ないいちじくの木、神の民イスラエルとエルサレム神殿を神は滅ぼされます。しかし神はまた新しい神の民、新しいいちじくの木をはえさせてくださいます。それがイエスさまの弟子たちの共同体、キリスト教会です。滅びと聞いて怖がる弟子たちにイエスさまは、大事なものは神を信じる事だと言われます。

私たちはこういう聖書の箇所を読むと、滅びるのは怖いと、滅びの方にばかり心に向けてしまいます。しかしイエスさまは、滅びを怖いと恐れるよれも、神さまはあなたがたを救いたいと思って招いて下さるのだから、そちらの方に心向けなさいと言っておられるのです。今日の聖書の中心は、22節の「神を信じなさい」という言葉です。呪われて本当に枯れてしまったいちじくの木を見て動揺する弟子たちに「神を信じなさい」と言ってもう一度、神の救いへと弟子たちを招かれた言葉です。「神を信じなさい」を原文から直訳すると「神への信仰を持ちなさい」となります。これは御利益信仰ではなく、神が新しく与えて下さる信仰です。新しい信仰とはこういうものです。今まで創造主である神さまは自分とは何の関係もないと思って生きて来た人、自分の力でここまで頑張ってきたんだと思っている人が、大きな問題にぶつかって、「いや、ちょっと待てよ。私の命は私の自由になるものではなく、神さまから与えられていたものだったのだ」と気づいて、創造主である神さまのもとに帰ろう。この神さまは大切な独り子イエスさまの大切な命でも私のために差し出して愛して下さる神さまだから、この神さまに全面的に信頼し、私の人生をおゆだねしよう。この神さまと一緒に新しい命の道を生きようと決断することです。喜びの時も苦しみ、悩みの時も創造主である神さまはこの私を決して見捨てず一緒に歩んでくださる方だと信頼することです。これが、神さまが新しく与えてくださる信仰です。